

グスクの縄張りについて (上)

當 眞 嗣 一

(沖縄県立博物館)

On the GroundPlan of the Gusuku(the Medieval Castles)

Siichi TOUMA

(Okinawa Prefectural Museum)

1、はじめに

本稿の目的は南西諸島のうち奄美大島から八重山群島にかけて分布するグスクの縄張り⁽¹⁾把握を行うことによりグスク研究の基本資料の蓄積を図り、併せてグスクの防御遺構を史料化することにある。

近年グスクの性格について研究者間で活発な論議が行われている。この論議は、北九州から瀬戸内地方に分布する神籠石をめぐる、霊域とする説と古代山城とする説が対立した、いわゆる神籠石論争になぞらえて、「グスク論争」⁽²⁾といわれている。

ところが、グスク論が活発のわりにグスクの本質をとらえる上で必要な縄張り研究がほとんど行われてない。グスク研究の動向についていえば、実際グスクの中に踏み込んでいて過去から現在に残されている遺構を読み取り、それを縄張り図として記録するという基本作業が進んでないのが実情である。今後のグスク研究の課題は、県下300箇所以上⁽³⁾のぼるといわれるグスクの縄張り把握と、防御遺構の整理・分析という基本作業を推し進め、グスクの縄張り研究を発展させていくことだと思う。

そこで本稿では、筆者が近年実施した縄張り調査の成果を提示し、各グスクの防御遺構の整理・分析を試みることにした。

なお、縄張り調査とは地表面観察によってグスク石垣や石塁・堀・土塁・虎口(グスクへの出入り口)等の防御遺構を把握することを主眼とする調査で、その成果については「縄張り図」⁽⁴⁾としてまとめられる。グスク研究はこの縄張り図の増加によって大きく進展していくことと思われる。

2、グスクの形態

沖縄島中・南部や先島諸島等の石灰岩地帯のグスクは石垣を多用しながら築城されている。しかし、奄美大島と沖縄島北部、あるいは沖縄島中・南部でもとくに石灰岩の発達が見られないところでは石垣のないグスクもある。こういうところのグスクは、石塁をめぐらして曲輪としたり、高い石垣を築いて障壁とするかわりに、山の傾斜面を削平して平場（防御された削平地のことで曲輪と呼ぶ）とし、その下に崖をつくり（切岸と呼ぶ）、城外と地続きの地形では堀を設けて独立性を保つようにつくられている。

したがって、グスクかどうかを判断するには石塁や石垣等の有無だけでなく、防御された削平地や堀・切岸などの存在も確かめつつ総合的にみていくことが重要である。グスクの確認はこれまでややもすれば遺物包含層の有無の確認や石垣遺構が存在するかどうかということを中心に行なわれてきたきらいがあった。今後は、削平地や堀切などの有無についても注意を払いながらグスクかどうかを判断していくことが必要であろう⁽⁵⁾。

村田修三は、中世城郭の特徴として「防御された削平地を曲輪と呼ぶ、上昇斜面を削り取って下降斜面に盛り、縁辺のエッジをきめて、その下を切岸（城壁）にする。城外と地続きの地形（台地や尾根続き）では堀りを掘って遮断する。」また、「元々平城や館の場合は堀が不可欠で、掘った土は内側に盛って土塁となる。山の場合は自然地形の要害性（急傾斜等）を利用するので、削平だけで、堀などをとまわなくても、城郭となりうる」とし、中世城郭確認の原則は、削平地（郭）があることが必要条件、堀（山城では空堀）のあることが十分条件になると述べている⁽⁶⁾。

この村田の主張を参考にして考えると、グスク確認の原則は削平地および石塁によって囲まれた郭のあることが必要条件、堀および障壁としての石垣のあることが十分条件になる。石灰岩地域では、岩盤が石灰岩のため防禦上堀を設けた方がよい地形であっても堀を掘ることができなかった。したがって、この地域では、石垣や石塁などを障壁にするグスクが堀に代わって発達していったのである。

グスクの変遷については、非石灰岩地域において障壁としての堀・切岸をもつグスクおよび防御のために断崖の縁辺部に柵列をまわしたグスクなどがまず出現し、その後、石垣による築城法の導入に伴ってとくに石灰岩地域に石塁や石垣を多用するグスクがつけられるようになっていったのだと私は考えている。以上のことについては、奄美大島や沖縄島の非石灰岩地帯に初期のグスクが多く見られ、しかも、これらのグスクが石塁や石垣のないことによっても傍証できる。

沖縄島中部は、他の地域に比べ耕地面積が広いうえに生産力が高く、さらに石材が容易に入手できることもあって、この地域に所在するグスクの中から浦添城、中城城、勝連城、

首里城などのような大型化するグスクが現れていった。やがて、琉球が国家統一に向かうと浦添城や首里城といった地の利を得たグスクのみが王城へととして発展していくのである。

グスクに石垣が導入される時期は、発掘調査の結果によると14世紀の前半から中ごろにかけてであり、本土の城が石垣を採用する時期より100～150年も古い。グスク石積みにはいろいろな形態や構造が認められ多様である。用材の取り方からいえば、石面の形状として野面と切石があり、それぞれ野面石、加工石と呼ばれる。石積み技術には野面積み、布積み、相方積みと称される積石技術があり、基本的に野面積みから布積みそして相方積みへという変遷を辿っている⁽⁷⁾。ところが、野面積みの場合には簡便な石積みのために各時代

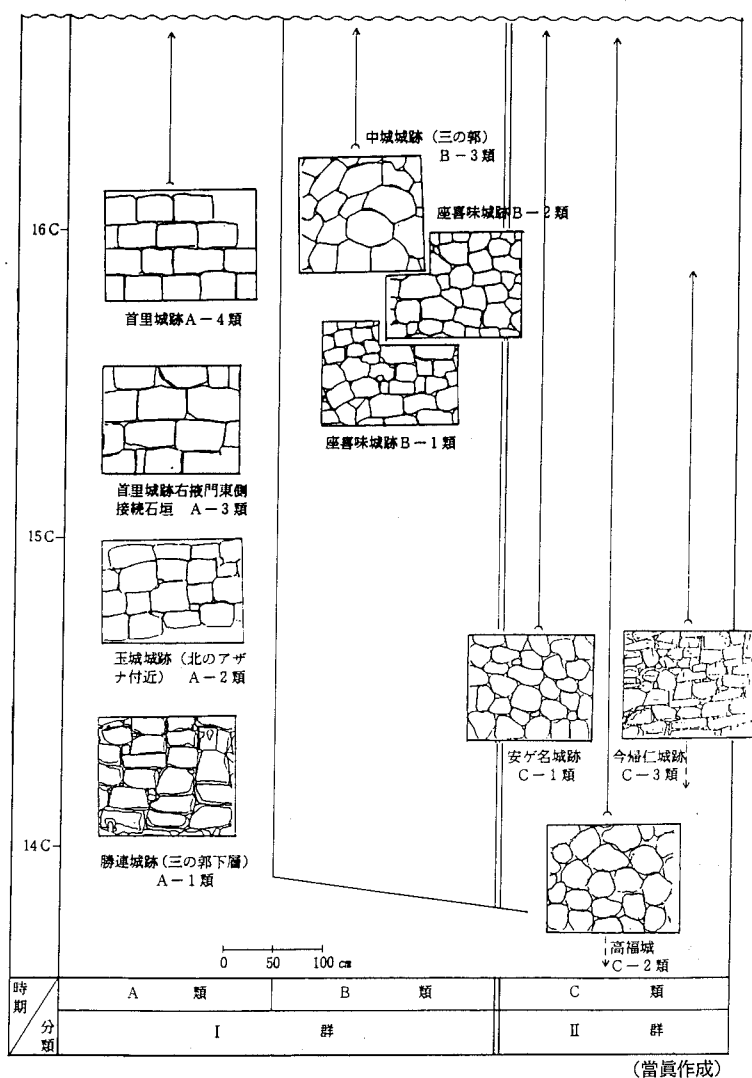


図-1 グスク石積変遷図

を通じて継続して見られる石積みであることを考えると、単純に野面積みのグスクだということだけで古いグスクだと決めつけることは危険である。⁽⁸⁾

沖縄のグスク石垣を一見すると、本土の城石垣とは印象が異なる。グスクの石垣の城壁はその平面形においてゆるやかな屏風形のカーブを描き曲線になっているのに対し、本土の城は直線的に折れ曲がっている。さらに、出角のところが稜線を付けずに曲面処理されていることや法面の勾配が棒法であることなども、本土の城の角が稜になり、弓状の勾配になるものと大きく異なっている。一部のグスクでは石垣上に胸壁を設け、城門に石造アーチを取り入れている点も異なる。あるいは城壁石垣の一部を物見台状に突出させるあたりも本土の城には例がない。

城壁に多数の突起を持たせたり石垣の塁線がカーブを描いたりするのは、城壁に殺到する敵兵を側面から観察したり迎撃する目的で築かれたものである。このように、沖縄で早くから石積みの築城技術が発達したのは、中国との貿易を通じて大陸の文化を吸収した結果であり、その時に築城技術も大きな影響を受けたからであろう。⁽⁹⁾とはいえ、グスクの起源については前述したとおり本土の中世城郭との関係でとらえられることから、グスクの誕生・生成・発展の過程のすべてを単純に大陸からの影響のみで解くことはできない。いずれにしてもグスクについてはなお不分明で、今後の調査と研究にまつところが多いのである。

グスクが造営される時期はほぼ12世紀後半から15世紀ごろで、この時代の琉球は、農業と東アジア諸国との交易で得た富を基盤とした地方領主である按司が出現し、たがいに貿易の利権や支配領域の拡大をめぐる争った国家台頭期であった。力のある按司たちはグスクを本拠としながら抗争を繰り返し、按司の中の按司ともいうべき「大世の主」に成長し、14世紀には今帰仁を居城とする北山、最初は浦添城ついで首里城を居城とした中山、島尻南山城を居城とした南山の三大政治勢力にまとまっていった。いわゆる三山時代である。この情勢のなかで南部の東海岸の佐敷から起こった尚巴志がまず中山を討ち、続いて北山の攻略に成功し、さらに1429年（異説もある）に南山王を滅ぼして三山を統一する。琉球王国の成立である。

グスクの分布は、北は鹿児島県の奄美諸島から南は宮古・八重山諸島にいたるかつての琉球王国の政治支配領域に広く分布している。奄美諸島と沖縄島ではグスク、宮古列島ではジョウ、八重山列島の石垣島ではスクと呼び、いずれも城の字をあてている。分布状況をみると分布調査の行われた沖縄島とその周辺離島では223か所となっている。⁽¹⁰⁾その内訳は、北部で45か所、中部で65か所、南部で113か所で、北部地区に薄く、南部地区に厚く分布している。ちなみに、南部の糸満市でのグスク分布状況をみると42km²に43か所のグスクが確認されており、1km²に1か所の割合でグスクが存在していることになる。⁽¹¹⁾宮古諸島

では16か所報告¹²⁾されているが、石垣島等その他の島々では分布調査が不十分で実数は不明である。

グスクの地取りは、防御するに適した場所に立地するものが多く、地形を巧みに利用して峻険なところをそのまま生かし、峻険でないところは高い石垣や二重に石垣をめぐらし、あるいは斜面を削平して切岸にしたり堀切を設けるなどして築城されている。首里城・中城城・勝連城など大型のグスクでは、天然の要害となる石灰岩台地に主郭を配し、水場を内郭にとりこむなど、全体¹³⁾の縄張りの意識が明確である。

縄張りとは、城郭用語としては石塁や石垣あるいは塁濠の平面形態のことをいう。つまり築城プランが縄張りである。だから、城郭の研究では縄張り研究が重視される。沖縄のグスク研究ではこの縄張り研究の立ち遅れによって、グスクの実態があまり把握されていないことは前述したとおりである。

以上のことからわかるとおり南西諸島のグスクはその占地・縄張・構造・出土遺物などからみても城郭とみるべきであり、按司が地域支配と領民保護のために築いた軍事的施設であることがわかるのである。私たちは、城というと高い石垣や天守閣、白亜の城壁を考えがちであるが、沖縄のグスクにも本土の中世城郭にも、天守閣や白亜の城壁は存在しない。本土の城で天守閣や白亜の城壁が存在するのは近世の城郭になってからである。中世の城郭は堀や土塁、切岸がみられるだけで、なんの変哲もない山や丘同然である。

その点沖縄のグスクでは、石塁や石垣が残っているので本土の中世城郭と比較すればむしろ城らしく見えるのが多い。グスクは、前述のように石灰岩地域では石垣、石塁によって区画される曲輪、非石灰岩地域では堀切や削平地（切岸によって区画される）から構成されている。曲輪の一つ一つはいずれも規模は小さいが、これらの小規模曲輪群がいくつか連結して城郭を形成するのを特徴とする。曲輪を実際どのように配置するかが「縄張り」であるが、大類伸や鳥羽正雄の分類法にしたがえば、梯郭式、連郭式、輪郭式などがみられる¹⁴⁾。

グスク築城にあたっては、グスクを防御し、敵を撃退するために曲輪をどう配置するか、曲輪ごとの構成をどうするか、敵が集中する出入り口をどう取りつけるか、敵兵に対してどうしたら有利に攻撃できるか等々築城プランである縄張りについていろいろな工夫がなされた。

城の出入口を虎口というが、グスクにみられる虎口は大陰虎口から石造拱門の虎口までいろいろな形態がみられる。大陰虎口とは、城壁をただ一か所だけある幅で断ち切って出入口をつけたもので最も簡単なものである。このような虎口では、虎口に殺到する敵兵を払うことができないので、沖縄のグスクでは虎口の前に長く屈曲する通路を取り付けることによってその弱点をカバーした。その他に沖縄の民家などにみられるヒンプンに似た一

文字虎口や虎口に四角形の枡形を築く枡形虎口などもある。

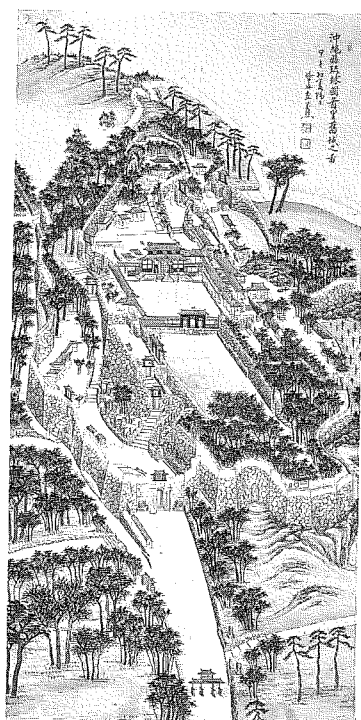
石垣造りの大型グスクの虎口は糸数城の例のように古くは石灰岩の石積みの上に木造の櫓を架す櫓門であった。ところが15世紀の中ごろから石造拱門（アーチ）の技術が導入され座喜味城・中城城・勝連城・知念城などにみる城門として完成するようになった。石造拱門を造る技術は、大陸から学んだ技術であったが、それらを城門に取り入れて、城郭建築に利用して発展させたのは当時の琉球の人々の知恵の結晶であった。この種の石造拱門は本土の城郭建築には見られないもので、ここにも沖縄の石造文化の一端をしのぶことができる。

首里城の場合は外郭の門に限り石造拱門をかけ、その上に木造の櫓をのせていた。一方内郭の門の場合には白銀門だけを除き石造の拱門はなく、単に石垣の上に木造の櫓を架すだけであった。櫓は城外の見張りをしたり、城に侵入してくる寄せ手に対して矢を射る屋根がけをしたところであるが、石造の拱門が外郭だけ架けられるのは、城の攻防戦の際、最も激戦になる率の高い場所が外郭の門で、敵から攻められたときに火などで焼け落ちないようにするためとくに外郭の城門だけは頑丈にする必要があったからである。

石造構造をとる虎口では、図-2のように虎口部分を深く湾入させて石垣



図版-1 糸数城跡城門



首里旧城の図
図版-2 仲宗根真補筆（沖縄県立博物館蔵）

の左右が迫り出しているのが特徴的である。これは、虎口に向かう敵兵に両側から横矢が掛けられるようにするためである。このような城門の構えは、中城城の大手門にも見られる。また、座喜味城の場合には、大手にあたる第一門の石造拱門の右側（東側）の城壁が緩やかにカーブを描いて南に大きく折れ、城門に殺到する敵兵に対して横矢が掛け

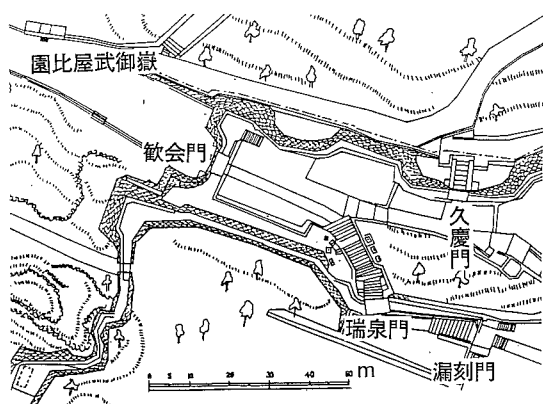


図-2 首里城飲会門付近図

られるようになっていることがわかる（図-3）。

ところで、中城城や安慶名城には狭間が認められる。中城城の狭間は西側の曲輪の城壁の中に三か所並んで作られており、三か所とも大手に通じる旧道からの侵入者を睨んでいる。また、安慶名城の場合には、一の郭の北東隅の城壁に開いており、近くの小高い丘を射程において作られている。狭間からの迎撃にどのような武器が使用されたのであろうか。藤井尚夫は、「少数の狭間の限られた射界では死角ができ、鉄砲や弓での迎撃効果は低い」と考え、ハンドキャノン（手砲）用の狭間を想定している⁽¹⁶⁾。ハンドキャノンとは中国から中近東で多く用いられた武器で、宇田川武久によると中国

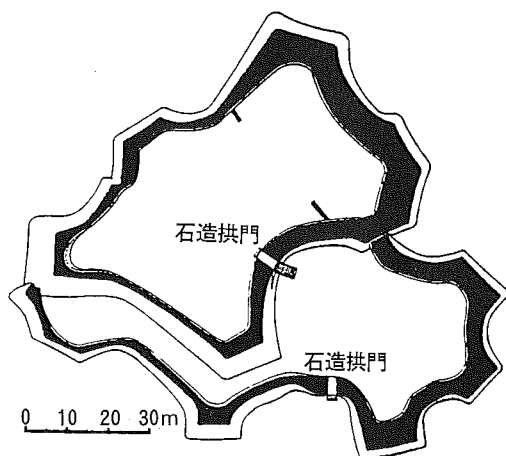
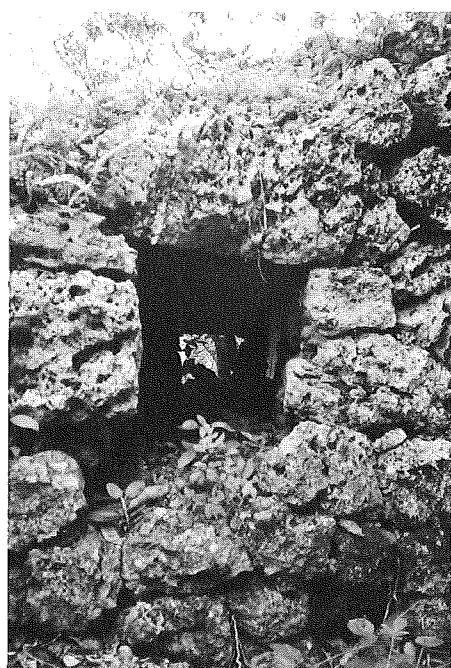


図-3 座喜味城略図



図版-3 安慶名城の城壁に設けられた狭間

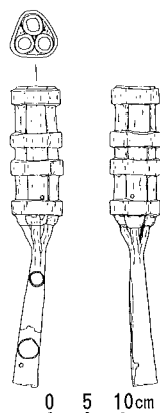
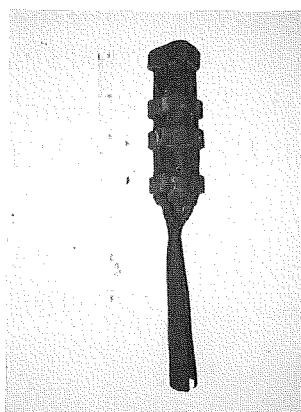


図-4 ハンドキャノン（沖縄では「ヒヤー」という）
（沖縄県立博物館蔵）



図版-4 「ヒヤー」
（沖縄県立博物館蔵）

「ヒヤー」と呼ばれ冊封使行列絵巻等にも描かれている（図版-5）。この絵図では琉球側の護衛兵が右手でかかえ先から火を吹いている光景が描写されている。両耳をおさえているところを見ると大きい音を鳴り響かせているところであろう。この「ヒヤー」は、『中国古代兵器図集』で、三眼銃とされ「多くの管をもった手持銃で、銃身は三個の管で鑄造され、品、字になっている。多くはたが（帯状の輪）で補強されている。尾部には一つの尾（目針穴）があって、木製の柄が取り付けられている。それぞれの銃管には一つの火門があり、連続して点火と発射ができる。（中略）ただ、これらの銃器類は使用が不便である上に破壊力も小さく、照準があわせにくいことなどから、使用期間はそれ程長くない、淘汰されてしまった」と説明されている。

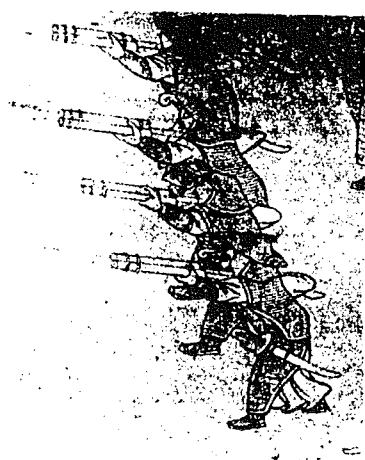
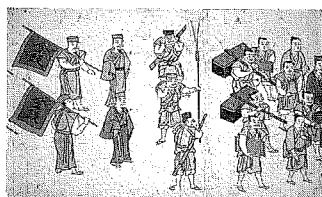


図-5 明軍が使用しているハンドキャノン部分『中国古代兵器図集』より



図版-5 冊封使行列絵巻（部分）（沖縄県立博物館蔵）

ではすでに嘉靖30年(1551年)ころには存在していたとみられている。図-4の実測図は、⁽¹⁷⁾沖縄県立博物館に所蔵されているハンドキャノンである。

『中国古代兵器図集』(成東、鐘少異編集)⁽¹⁸⁾や『武器』(ダイアグラムグループ編)⁽¹⁹⁾等に掲載されているハンドキャノンとはほぼ同じものである。このハンドキャノンは沖縄で

1466年(文正元)尚徳王のころ、將軍義政寝殿の庭前で砲を鳴らして京人を驚かしたという記録があるが、この時の砲も「ヒヤー」だった可能性がある。石弾と考えられる大小の球形の石が首里城、勝連城、大城城、里遺跡などから出土していることから、藤井が指摘するようにこの種の球形の石弾がハンドキャノンの弾に使用された可能性は高い。⁽²¹⁾

3、グスクの用語について

グスクで使われる用語を理解するため名護城（名護市東江在）の縄張り図を参考にしながら遺構について説明することにする。

名護城（図-6）は別名ナングスクとも呼ばれる。石垣が認められないことからこれまであまり注意されなかったグスクであるが、近年の調査で堀切やみごとな曲輪配置を持つグスクとして知られるようになってきた。⁽²²⁾ 名護市街地の東側、標高109mラインを主郭とするグスクで、名護岳から西側にかけてのび

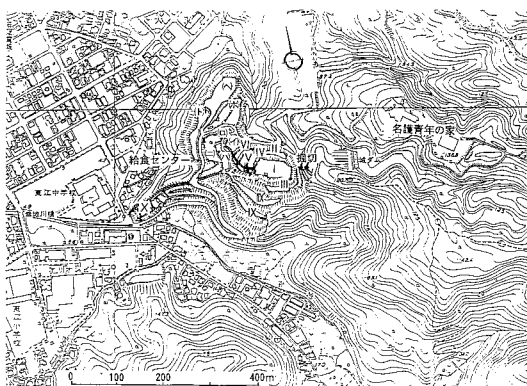


図-6 名護城縄張り図

る舌状台地を利用して城はつくられている。周辺市街地との比高は100m前後ある。上面は比較的大きな平場で、その周辺は雛段状に小平場がいくつも連結し、現在は台地全域が公園になっている。

台地の北側は深い谷間となりその底を川が流れている。西と南は急な斜面に囲まれており、その裾には最近まで水田が広がっていたが現在では宅地化が進んでいる。このことから台地の北・南・西は自然の要害を形成していたことが理解できる。一方、東側の名護岳に連なる尾根筋は平坦な土地が広がっていてグスクにとって最大の弱点となっている。したがって、この方面の尾根筋を遮断する形で大小2本の堀を設け舌状台地部分を台地から切り離してある。このように台地や山の尾根を遮断する形で掘られた堀のことを堀切という。前述したように、土壌が粘土質で堀が掘れるところでは堀を設け障壁とするが、沖縄島中・南部のような琉球石灰岩地帯の場合では、堀を設けることができないために石垣を高く積み上げることによって尾根づたいに侵入してくる敵兵を防ぐようにした。

名護城の堀切は、山の尾根を遮断する形で掘られたものであるが、この種の堀切では堀底が通路として利用される時もある。これを堀底道という。名護城の場合には堀底道というより伏兵を置いたりする小曲輪として用いられたものと思われる。なお、西原町所在の幸地グスクの堀切は堀底道として利用された例として挙げることができる。普通は堀や堀切をつくる際に掘りだされた土を積み上げることによって土塁がえられるが、沖縄のグスクでは土塁の発達は顕著でない。

縄張り図の中で白抜き（例：図-6のI～Xなど）になっているところは曲輪という。曲輪とは石垣や切岸あるいは堀・土塁および自然の斜面や川などで区切られたグスクの中の一区画のことである。縄張り図からもわかるとおり名護城は曲輪配置が複雑になってい

る。神アシャギがある頂上部の平場を主郭（Ⅰの郭）にしているが、この主郭の東側に続く尾根を幅8㍍の大きな堀切と幅2㍍の小さい堀切によって遮断し、グスク全体の独立性を保つと同時に北東側から東北東側にかけては敵兵の侵入を許さないために主郭のすぐ下にあたる斜面中腹部には細長い曲輪をまわしている。このように斜面の途中で主要な曲輪のすぐ下にあたる位置につくっ

た曲輪を腰曲輪という。さらに北西～西北西の最もなだらかな下降斜面にかけては雛段状に曲輪を配置し、主郭に侵入してくる敵兵に迎撃の構えを取っている。この雛段状の曲輪のあるところは、もともと傾斜が緩やかであったところであるが、斜面のへりを削って崖とするとともに、雛段状に平坦面を造成して曲輪にしている。このように斜面を削って城壁としたものを切岸（きりぎし）という。



図版－6 小湊グスク（奄美笠利町）の切岸

主郭以外にもグスク内には比較的大きな曲輪が数箇所認められる。往時からの名称なのかそれとも近年になってそう呼ばれたものかははっきりしないが、それぞれの曲輪に名称がついている。ウチ神屋（イ）、フスミ屋（ロ）、ヌル殿内（ハ）、根神屋（ニ）、名幸祠（ホ）、サクマドウ（ヘ）、イチジク屋（ト）等であるが、いずれも、比較的広くとられており、当時これらの曲輪に主要な施設が配置されていた可能性は高い。発掘調査によってどんな施設が建てられていたかがわかるので、今後考古学的調査が必要となる。水場としての井戸は、瓦葺拝殿が建っている東側の奥にあるが、規模が小さくわずかな窪みに湧水が溜まる程度のものである。この井戸の上位には小曲輪があり、この曲輪から井戸がよく見通され、水場の防御ができるようになっている。

さて、城内に入るには、現在、山裾を蛇行しながら等高線に沿って設けられた車道を上がると、グスク南面の最も緩い傾斜面に取りついたコンクリート製の階段を一段一段上がっていく二つの方法がある。車道についてはごく近年に開通した道路であることから、古くは、階段の取りついた後者の方が城へ上る唯一の通路であったと思われる。おそらく虎口もここへ取りついていたであろう。この階段の中間地点、標高45㍍付近には雛段状になった3段の平場があり、小曲輪が形成されている。実際この小曲輪からは、小路を通っ

てグスクへ向かう寄手に対して側面からの射撃が可能である。敵兵が城内に侵入しようとする場合に、敵の進行方向の側面から射撃を加える手段を横矢掛りという。

この名護城は、前述したように四方がかなりの断崖によって囲まれ自然の要害をなしている。そのため城内に入るにはこの通路を通るしかない。だからこの通路を厳重に守備することが城防衛上不可欠であり、そこに横矢がかけられることは城を守備する城兵にとってきわめて有利である。城の出入り口のことを虎口という。虎口は城の攻防戦の際、最も激戦になる場所であり、城防衛上の要となるところである。そのためにどのグスクでも虎口をどこにし、どのようにして守備するか縄張りに工夫が必要であった。名護城の場合は虎口への通路を狭めた上で距離を長くし、さらに通路の東に小曲輪を設けてそこから横矢が掛けられるようにして、この問題を解決している。座喜味城の場合は、虎口を石の拱門にしたうえで、東側の城壁が鍵の手に折れ、虎口に殺到する敵兵を後方や側面から射撃できるように工夫してつくってある（図-3参照）。このように城壁ラインを鍵の手に折った箇所を折りという。

以上、名護城の構造を概観しながら、用語を理解するためにグスク遺構について説明した。名護城は、全体の縄張りや曲輪配置、あるいは水場が城内に確保されていることなどをみると、沖縄島北部の中でも北部一帯のグスクを代表する今帰仁城について優れた城郭だと言わなければならない。では、この名護城はいつごろ創建されたものであろうか。残念ながら、代々名護按司が居城していたというだけで、他のグスクと同様全く記録に残されてない。伝承によれば、もともと北部地方で勢力を伸長させた中北山の系統に属して周辺の地域を支配して繁栄していたが、北に隣接する羽地城に拠る羽地按司の台頭によって滅ぼされ、以後羽地按司の支配下に置かれたといわれている。⁽²³⁾この時期はほぼ14世紀の中葉から後半の頃である。この時代の琉球は、農業と東アジア諸国との富を基盤とした地方領主である按司が出現し、たがいに貿易の利権や支配領域の拡大をめぐる争った国家胎動期であった。

主郭をとりまく周辺部や主郭の南側崖下あたりには遺物包含層が形成されており、その地表面からは牛の遺存骨や貝殻等に混じって輸入陶磁器の破片が採集される。輸入陶磁器の年代は14~15世紀に属するもので、⁽²⁴⁾伝承されいるグスクの時期にほぼ符号する年代である。

4、各地のグスク

つぎに、縄張り図をみながらグスクを個別に検討する。まず、北に分布する奄美大島のグスクから検討し、随時南のグスクへと移っていくことにする。縄張りの調査にあたっては筆者一人でおこなったものが大部分であるが、沖縄県立博物館友の会のグスクサークル

のメンバーと一緒に調査したのもある。記して感謝申し上げたい。

赤木名グスク（鹿児島県奄美大島郡笠利町）

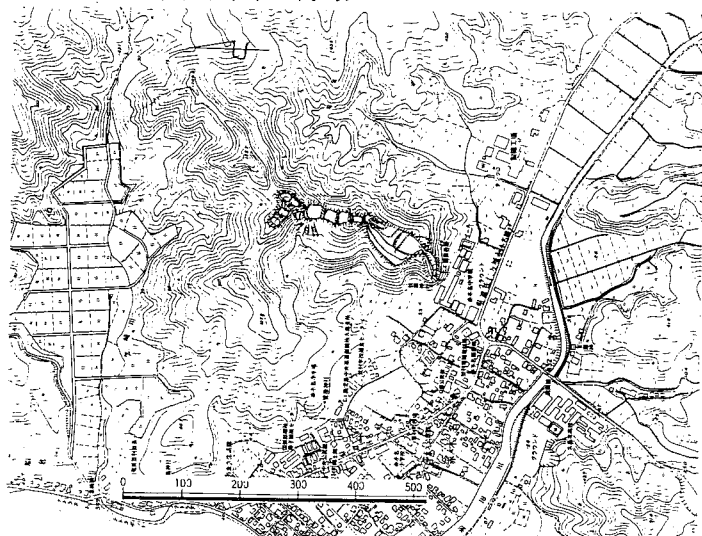


図-7 赤木名グスク縄張図

赤木名中学校の裏山にある。この裏山の山裾には観音寺跡や秋葉神社などがあるが、グスクとの関係はまったくない。観音寺の開山は、昭和46年に発見された碑文によれば延宝3年（1675）町田嘉衛門尉が大島代官として赴任した年であるという⁽²⁵⁾。また、秋葉神社がこの地に鎮座した年代は、安永5年（1776）丙申正月と刻銘された手水鉢があることから、それ以前薩摩の大島奉行所の仮屋役人の信仰によって創建されたものであろうといわれている⁽²⁶⁾。秋葉神社の本社は、静岡県周智郡春日野秋葉山上にあり、迦具土神を祭り、防火の神として朝廷をはじめ足利、徳川、島津および西国大名等にあがめられていた。

さて、グスク域は秋葉神社のすぐ裏手から北にのびる山一帯を含め比較的広い範囲におよぶ地域である。秋葉神社の境内を抜けて裏手にまわると幅1¹/₂程の小路が取りついており、そこからグスク内に入っていくと右手の方に斜面を削って切岸にした小曲輪群が雛段状に作られている。城壁とする石垣や石塁は全く見られず、切岸や堀切あるいは豎堀等によって防御を強化する中世城郭類似のグスクである。



図版-7 赤木名グスク堀切

赤木名グスクの山頂部は標高100⁽²⁷⁾の嶺とその北にある標高105⁽²⁷⁾の嶺から成っており、これらの南北にのびる尾根を軸にして数本の堀切によって区画されながらそれぞれに曲輪が連結するような曲輪配置をとっている。グスクの東側では、斜面のヘリを削り落として切岸とし敵兵がとりつけないにうに工夫し、西側では斜面部を造成しながら雛段状に腰曲輪をまわして敵からの侵入を許さないように築かれている。⁽²⁷⁾



図版－8 赤木名グスク遠景
(西から)

標高60⁽²⁸⁾の等高線上には台形状の平面プランをもつグスク中一番大きな曲輪があり、そのヘリを取り囲むように土塁が観察される。また、曲輪の西側には腰曲輪を数段に配し、東側は急崖となって他の曲輪より一段と防御が強化されていることが看守される。以上のことから考えるとこの曲輪が主郭部分であり、中に重要な建物のあった可能性が高い。なお、山頂部の北側には数本の堅堀が掘られて北側からの侵入に備えている。堅堀とは山の斜面等を利用して防御のために掘られたスベリ台に似た形の堀で、等高線と交差する形で掘られている。

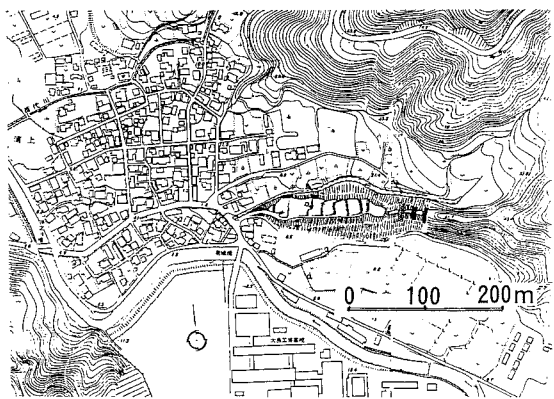
城の来歴や城主のことについては定かでない。地元の人々は、赤木名グスクと呼び、ノロ⁽²⁸⁾等が祭祀を行う場所だったともいっている。

浦上グスク（名瀬市浦上）

名瀬市浦上、大島工業高校の北東約50⁽²⁹⁾にあり、浦上川沿いの舌状台地の先端部を利用して築城されたグスクである。有盛神社は全て城域の範囲である。⁽²⁹⁾

グスクの北には中島川、南には浦上川が接し、両方の川に挟まれる形で立地する。このグスクは城壁に石垣を持たず東西にのびる山裾の先端部を雛段状に削平しながら切岸と自然の要害性を利用して築かれたもので本土の中世城館に酷似する。

有盛神社は平家三武将のひとりである平有盛を祀った神社である。グスクの城域は



図－8 浦上グスクの縄張図

この神社の境内から後方に続く裏山にかけて広がり、標高45mの頂上部を削平して作った主郭から西側にかけて9つの小さい曲輪群が連なっている。東側の尾根は頂上部より若干低くなっていくが、10数m程いくとまた高くなり、高い山々に連続する。この低くなった尾根に幅4～5m、深さ3～4mの堀切が3本掘られていて、東側から尾根づたいに侵入してくる敵兵に備えている。近年、尾根を断ち切るようにバイパスが開通したためグスクが独立丘のように見える。地形的な特徴が捉えにくくなったのが惜しまれる。



図版－9 浦上グスク（バイパスの開通により独立丘に見える）

このグスクは、「平家の南島落ち」として伝わる平有盛が奄美大島の北部経営のため築いたグスクだとされているが、記録がなく真偽のほどは定かでない。奄美大島における平家伝説については、安永二年（1773）に道響という人物が藩命を受けて報告したといわれる『平家没落由来書』に詳しい。名瀬市誌にはその一部が紹介されている。⁽³⁰⁾

「建仁二年三月二十三日、即ち長門の壇の浦合戦の前夜、豊前の国から九州南表へ逃れた平家の一団は、屋久島を経て喜界島に上陸した。そこで三年滞在しているうちに、近くに大きな島があるのを発見したので様子をさぐらせたところ、主の無い島であるとの報告があった。それで資盛は島の西表へ、有盛は東表から西表へ、行盛は南表へ船を乗りつけて攻略した。全島の平定が成ると、資盛は島の西南部を領有して諸鈍に城を構え、有盛は北部を領して浦上に居住し、行盛は東部を支配して戸口に牙城を築いた。」

この話をそのまま史実として信じることはできないだろう。しかし、奄美大島のグスクが本土の中世城郭に酷似していることを考えると、ある時代に本土の築城技術が入ってきたことは確実であり、その時代が何時だったかははっきりしないが、源平合戦との関連でグスクの発生を考えて見ることも必要かと思われる。そのためには、本土におけるそのころの城の実体を把握すると



図版－10 浦上グスク堀切

同時に奄美のグスクとの比較研究を行っていくことが重要であることはいうまでもない。ところが、そのころの本土の城郭研究についてはほとんど手つかずの状態であり、奄美大島のグスクについてもそうである。したがって現状では、両者を比較・検討していくことがなかなか難しい。筆者は、奄美大島のグスクを調査しながら発生期のグスクがこの地域にあるではないかということについて確信をもっている。

今後は本土における城郭研究の成果に目を向けつつ奄美大島や沖縄のグスクを見ていくことが強く求められているように思う。

伊津部勝グスク（名瀬市伊津部勝）

石垣のない切岸・削平地・堀切だけのグスクである。⁽³¹⁾このグスクが所在する伊津部勝は名瀬市の東海岸側小湊に河口をもつ大川の中流にあって、三方を深い山で囲まれた集落である。グスクは、深い山から大川に向かって伸びる舌状台地の先端部に位置している。グスクの北・西・南は大川の支流や水田によって囲まれている。唯一の尾根続きである東側には大小二本の堀切が掘られ、グスク部分だけの独立性が保たれている。

堀切の西側に約1000平方メートルの広さの主郭を配置するが、北と東側は切岸、南側の下に幅の狭い腰曲輪を二段つくりそれぞれ防御を固めている。虎口は主郭西側の切岸を蛇行しながら直接主郭に取りついていたらとみられるが、ゲートボール場造成時に大きな改変を受けているため特徴をとらえることができない。

ゲートボール場造成時に曲輪の一部が破壊され、厚さ50センチ程の遺物包含層が露呈し、その際包含層中より輸入陶

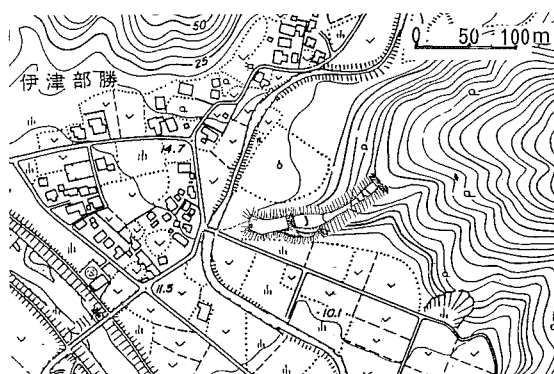


図-9 伊津部勝グスク



図版-11 伊津部勝グスク堀切



図版-12 伊津部勝グスクの主郭
(現在はゲートボール場
になっている)

磁器やカムヤキの破片が採集されている⁽³²⁾。採集された遺物に12～13世紀に属する白磁などが含まれていることから築城年代が想定できる。

註

- (1)地域によってはグシクというところもあるが、沖縄最古の歌謡集である『おもろさうし』にはグスクと表記されているのでそれにしがった。
- (2)拙稿「グスク論争」『論争・学説 日本の考古学 I 総論』 雄山閣 昭和62年9月。
- (3)『ぐすくーグスク分布調査報告(I)』 沖縄県教育委員会 昭和58年3月。
- (4)千田 嘉博「中世城館縄張り調査の意義と方法」『国立歴史民俗博物館研究報告』 第35集 平成3年11月。
- (5)県や各市町村発行遺跡分布調査報告書の中のグスク記載を見ると、遺物包含層の有無および石垣遺構の存在だけに注意が払われ、縄張りについての記述がまったく欠落しているのが多い。もっとも悪い例としては、「遺物の分布や石垣が見られないのでグスクではない」と結論づけているものもある。今後グスク確認の原則に注意してグスクの分布調査を行う必要があることを痛感する。さらに、グスクの分布報告には簡単な縄張り図を掲載することが強く望まれる。
- (6)村田修三「中世の城郭」『講座・日本技術の社会史、土木、第六巻』日本評論社 昭和59年。
- (7)拙稿「グスクの石積みについて(上)」文化課紀要 第5号 沖縄県教育庁文化課 1989年3月。
拙稿「グスクの石積みについて(下)」文化課紀要 第6号 沖縄県教育庁文化課 1990年3月。
- (8)たとえば沖縄島南部のグスクには野面積みのグスクが多い。これらのグスクが古いグスクに属するかというところではない。
- (9)拙稿「琉球の『大交易時代』とグスク」『第三回中琉歴史関係国際学術会議論文集』 1991年6月。
- (10)前掲 註(3)
- (11)『糸満市の遺跡分布地図』糸満市教育委員会 1992年発行による。
- (12)『ぐすくーグスク分布調査報告書(II) 宮古諸島ー』 沖縄県教育委員会 1990年3月。
- (13)グスクの中には、たとえば浦添城のように城内に溜め井をつくっているものもあるが、ほとんどのグスクが城内に水場を取り込んでない。城の中に水場があれば、この城は

発展する可能性をもつ城だといえるものの、ないからといって城の機能が失われるわけではないので、水場の有無によって城を否定することはできないのである。

(14)西ヶ谷 恭弘『日本史小百科 城郭』近藤出版社 昭和63年3月。

(15)拙稿「遺構から見たその特徴」『甦る首里城』首里城復元期成会 平成5年3月。

(16)藤井 尚夫「戦乱の琉球に煙る城の実像」歴史群像 No.6 1993年4月号。

(17)宇田川武久『東アジア兵器交流史の研究』吉川弘文館 1993年1月。

(18)成東、鐘少異編集『中国古代兵器図集』中国 解放軍出版社 1990年。

(19)ダイヤグラムグループ編・田島優、北村孝一訳『武器』株式会社マール社 1992年第16刷。

(20)真境名安興、島倉龍治『沖縄一千年史』沖縄新民報社 昭和27年11月第4版。

(21)前掲 註(15)

(22)拙稿『城—城に語らせた地域—の歴史—』沖縄県立博物館 1992年3月。

(23)新城徳祐『沖縄の城跡』(緑と生活社 昭和57年8月。

(24)『名護市の遺跡(2)分布調査報告書』名護市教育委員会 1982年3月。

(25)『笠利町誌』笠利町誌執筆委員会 昭和48年7月。

(26)前掲 註(25)

(27)前掲 註(22)

(28)中山 清美「奄美のグスク」『特別展図録 グスク —グスクが語る古代琉球の歴史とロマン—』沖縄県立博物館 昭和60年11月。

(29)前掲 註(22)

(30)『名瀬市誌 上巻』名瀬市誌編纂委員会 昭和58年8月。

(31)前掲 註(22)

(32)前掲 註(28)